佐藤 悠

HIRAKU-Global教員 海外渡航Report 03

第三期HIRAKU-Global教員

渡 航 先：フィンランド
研究機関：ヘルシンキ大学
期　　間：2023年4月27日〜8月4日

山口大学 大学院創成科学研究科
助教

2022年、山口大学大学院創成科学研究科生物機能科学分野の助教に着任。微生物が好む温度域をキーワードに、遺伝子情報と合わせたデータベースの構築に取り組む。地球規模で環境変化が進む中、発酵食品の生産をはじめ、ガスや水素などのエネルギーも作り出せる、微生物資源の安定的な活用を目指す。今回、訪問したラボとも共同研究を模索している。

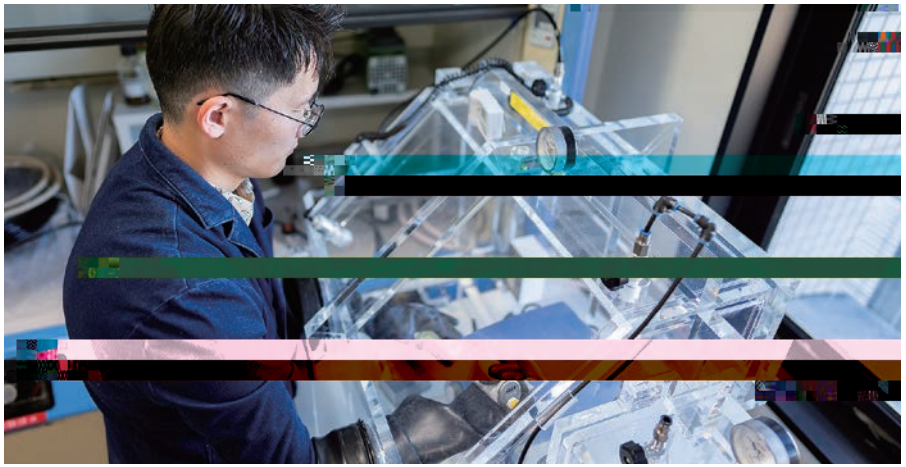
研究も人間関係も、鍵はオープンマインドに。

SNSを活用して、渡航先を開拓

佐藤先生が渡航先に選んだのは、フィンランドのヘルシンキ大学。訪問先のラボは立ち上げたばかりで、研究者とのコネクション構築を熱望していたそうだ。そんなラボとの出会いはSNS。海外では研究員の公募にSNSを利用することがあり、それを見かけた先生は、「人を求めているのなら、自分も何か役に立てるのではないかと考え、公募とは関係なく連絡を取ってみた」と言う。すると、すぐさま返事が返ってきて、今回の訪問が実現したそうだ。渡航の主な目的は、バクテリア内の分子がどのように動くのか、その解明に向けた新しい技術の習得。実際のところ、期待していたほど詳細な状態は観察できなかったが、将来的に使える技術をいろいろと教わったそうだ。

「渡航先の方たちはとにかくオープンマインドで、困っている人がいたら、惜しみなく手を貸してくれる人ばかりでした。建物内にあるラボ間の交流も活発で、すぐに議論が始まる風土も好感が持てました。自分の研究はもちろん、人の研究にも熱心に意見を出してくれるので、日常的にアイデアが飛び交う開かれた雰囲気に満ちていました」

ラボメンバーの集合写真。
写真中央がグループリーダーの Jarno Mäkelä 博士。



SNSを通して知った、縁もゆかりもないラボだったが、3カ月の間にすっかり打ち解け、帰る頃には国際共同研究に向けた打ち合わせも行ったという。「来年までには、研究費獲得に向けて動き出したい」と意欲を燃やしている。

海外で感じた、主体的に楽しむ姿勢

フィンランドと日本を比較する中で、「研究の質について考えさせられた」と語る先生。フィンランドでは、午後4時になるとみんな帰ってしまうため、勤務時間が日本に比べてとても短いそうだ。しかしそれぞれの研究において、ちゃんと結果は出している。こうした事実を目の当たりにして、変革に意欲を燃やしている。

「私たちの研究の進め方には、まだまだ無駄が多いのかもしれません。何をやって、何を省くべきか、精査していく必要があります」

また海外では、主体的に研究に取り組める点も魅力だという。ラボのリーダーがいつでもディスカッションを歓迎してくれるため、若手研究者たちは、面白い結果が出たらすぐさまリーダーのもとへ行き、意見を求めるそうだ。

「一緒になって考えるスタイルが、海外では当たり前なのでしょうね。今後は自身の研究室でもこうした風土が生まれるように、学生たちとの接し方を考えていきたいです」と語る。

最後にHIRAKU-Globalプログラムについて次のような感想をくれた。

「プログラムに参加して、異分野・同世代の研究者と、横のつながりができたのはとても喜ばしいことです。イベントで他大学の先生とご一緒したのですが、皆さん気さくに受け入れてくださいました。研究はもちろん、マネジメント面も含めて、忌憚なく意見を交わせる同世代がいるのは本当にありがたいですね」

研究者は時に孤独な存在だが、こうした一つ一つの出会いは心の支えになるであろう。